

僕の高尾山詣で やぎゅう

夏期講習 高尾山詣では今年で5回め。去年は一樹さんとふたり旅であったが、今回はひとり旅——といっても約4時間半の旅だった。ひとり旅はわびしさもあるが自由さもある。高尾山駅からケーブルカーの馬場までの途中で有名なトロロそばを食べ、おむろに山上に向う。

途中、樹や草に名札がかけられていて大いに勉強(?)になる。僕は写真撮るようになってから、植物の本や歴史の本や万葉集などを以前より多く読むようになった。もともと生物学はあまり好きでなかったし、まして本気に草花を育てる趣味は持たせていない。ただ山や野は好きで特に子どもの頃、折ったりちぎって食べたりした草花に関心があり、そんなものが生えている山野をよく歩く。

だから作品に植物そのものの生命力を表現することはどちらかといえば苦が手である。だから僕の写す植物は雰囲気の中の草花であり、草花そのものからにじんてくる何かを表現していない。

翌日の「写真裁判」で、小池先生に、もっと素直に写したらという「告発」を受けたのも、そのへんのことを指摘しているのだと思う。かつて伊藤知巳先生が「教えずだと思って撮ったら……」東さんが「ちよっと気に入らないのを撮ったら……」という意味もそういうことであろう。

対象に向っている時、これはいける!という気持ちの中味を反省してみると、自分勝手なこじつけや自己暗示みたようなものがはたらいていることが多い。リアリズムはそんなもので料理されるものでないのだ……。

毎年夏期講習に参加した中で、今回は参加者が一番少なかったが、学び得た点で最高に密度が高かったように思う。「高尾山詣で」はやはり創作の上では何かを学びたいという意欲が先決である。それにしても三重支部7名の参加は他支部に比べればカッカしたものだと思う。ただ残念なのはマンガの欠席である。東年こそ積立貯金で、老若男女、大挙して高尾山に攻め登ろうではないか。

フルマで行くなんて、オレとしても無理です。 ヨーサン

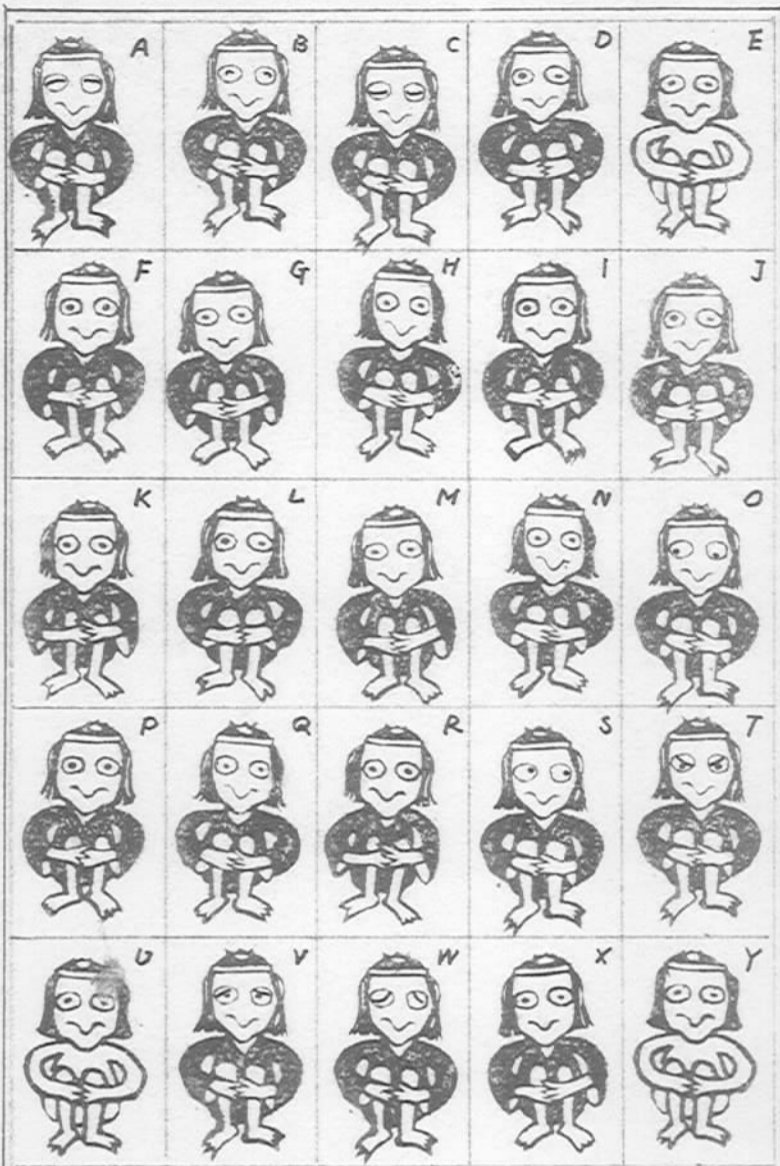
東京までの500料をクレー無しのフルマで走ろうというのだ、ニコリスミオのしたたかさを、あきれながら僕は冷たく傍観していた。お伴する破目になった篤也こそ、かわいそう。

8月9日、その日の朝、ニコリスミオがひょこんと現われたのは朝の8時。永田屋酒店はあきまの多忙さから急速に解放されつつあった。「タカオへ いっしょに行きませんか」ぬけぬけと言うスミオ。「エッ、どこへ？」しゃあしゃあとはほける僕。「高尾の山へ寝に行きましよう」ニコリ、ニコリ。「それはそれはご苦労さま、それで何時にご出発で？」ニコニコ。僕は十分余裕を残して笑った。

篤也が現われたのは、その後のことだった。「東さんも、いっしょに行きませんか」行きませんかという時のアクセントがなかなか妙味がある。篤也の「ナニナニしませんか」には、僕がかねがね敬意を払い且つ警戒を憶っていないのだ。ヤツはあの独特のアクセントで年寄りを友人を或は女性をたぶらかしているに違いない。

「うん？ そりゃちよっと無理や」
「でも東さんが行ったら皆よろこびますよ」
(また言う。誰がその手にのるものか)

午後2時頃だったろうか、それまでゴロゴロしていたスミオと篤也のふたりは「ちよっと出かけてきます」と言って何所かへ行ってしまった。



ホンモノ河童はどれだ？

(ヒント) ホンモノは2匹いる。1匹しかいないのや、3匹もいるのは似せものだ。
(賞品) 喫茶「つ」のコーヒー飲み放題。但し6時間で。
(しめ切り) 8月31日、ハガキで必着。

僕はその時しきりと頭の髪を気にしていた。盆で忙しくなる前に床屋へ行くつもりだったのだ。もう耳までかぶさっている。別に高尾へ行くわけじゃないが、ひとつ散髪に行ってくるか。

「東さん 何時に出発しますよ」「そいフルマかご無理なら陸の字の所まで今から送りますよ、陸の字の家も寝心地いい家ですよ。彼のところへ泊って彼と朝一番の新幹線に乗りませんか？」
「……………」

ここで啞然として黙ったのが僕のシッパイ。しかし負けるものかと、大急ぎで断りのせりふを考える。「それとも僕らとフルマ膝栗毛と行きますか」「それなら何時にしましようか？」ニコリは矢張り早やにたたみこんでくる。「東さん。ワインとウイスキーはどれにしますか？」篤也。

後で聞いてみると、スミオニコリと篤也のふたりは、すべて計画的だったのだ。ニコリはその前の晩から篤也邸に泊っていたのだ。

暮を打ちながらとまかく夜の12時迄はぬぼってみようと作戦かできていたのだ—— そうだ。

僕は負けた。僕は課られた。しかも彼らにマンマとやらねから、なんとなくまっぴりと高尾行きに心を躍らせていったのだ。